

古本屋の戦後

囚われし頃

古川 実

昭和三十一年札幌市豊平に古書売買兼貸本店りんご書房を開店した。入口に滑稽新聞付録の色刷絵葉書数十枚をすだれのように吊るし、店の正面の壁に「江戸大絵図」を貼り、香蝶楼國貞の美人画端物四五枚、針金編みの雑誌架けに藤村の『若菜集』『落梅集』などを人眼を惹くように吊るした。私の本業は製紙原料商なので、お手の物の紙屑から選り出した元手いらすの商品で盛装を凝らしたのである。数日して一人の老人が店に来て、この店の本全部引くため〇百円で買取りたいと申し出た。私は快諾して明日を約した。ところが翌日午後速達の手紙が届いた。都合により約束を取り消すとの内容で私はガッカリした。差出人は一誠堂書店山野成行とあった。まだ未加入であった札幌古書組合の組合長さんであった。これが私の古本屋の第一歩とすべきで

あるが、その一二年前から『日本古書通信』で個人名の通信販売を始めていたので、本当の意味の創業時期はすこぶる曖昧なものである。

私の前職は国鉄職員で、全国車号連絡協議会北海道議長などと稱していた時期もあり、末は悪くても中間駅の駅長位には落着く筈であったが、急転直下製紙原料商即ち紙屑商としてリヤカーを曳くことになったのである。この辺のいきさつは、『北の文庫』十号に「斜視と古本」と題した小文に書いたもので、ここでは省く。因みに北の文庫は現在千葉の放送教育開発センター情報資料室長藤島隆氏が札幌在任のころ編集していた図書館人の交友誌を兼ねた業務研究誌である。

さて取引先の製紙会社では、結構なお身分から紙屑商に変身した私を、鳥渡毛色の変った人間と見ていたらしいが、レッドバネにも非行にも関係なしと判ると、随分好意的に扱ってくれた。先ず会社の広大な敷地に幾棟もならんだ原料倉庫は、従来は外来者お断りで市内の古本屋の出入禁止になっていたが、私一人だけは目に見てくれることにな

った。但し債権債務、殊に人事関係の書類等は持出し不可で課長がチェックすることである。許可を得て、初めて未選原料倉庫に這入ると、矢張りこゝは古本屋の処女地であると思つた。人の腰ほど一定の長さで棒しばりになった官庁下げの故紙が山積みされている。それらが『北海道旧土人保護沿革史』とか『北海道移民史』の類で、驚いたことに同じ本を何十冊も束ねたものである。傍らの古びた木箱の中味を一冊引き抜いてみると、地券表紙に往来翰控・函館出張所と達筆の墨書がある。読み込んでみると紛れもなく、よく噂には聞くが一度も実物に接したことのない明治初期の開拓使文書というものらしい。急に不安と期待が全身に疼いてくる。薄暗い倉庫でせつせと本を選り出しながら、これが全部自分のモノになるのだと思ふと何だか夢のようで、まことに至福のひとつときであった。

少傷みの杉田玄白らの『解体新書』、揃いに近い竹久夢二のセノオ楽譜、北原白秋自筆の短歌のまくり三枚など、むろんこれを特別の稀覯書という積りはないが、このあと私には再度の御縁がなかった。また当時それ程に珍本でなかった司法研究資料アイヌの犯罪』は昨今の市場から全く姿を消してしまつたので、反って鮮明に記憶している。

昭和三十八年頃から北海道にも急速にテレビが普及しはじめると、その影響でさしも全盛を謳歌していた貸本店にも翳りが出て転廃業が続出するようになった。私も貸本に見切りをつけて古書専業の決意を固めた。後年若い店主石川昌治君の口から度々「他店の肥やしになるばかりじゃ能がない」という言葉に接して、私はひそかに苦笑した。当時は正にその通りの心境で、あなた任せの業者持込みを控え目にして、白店の肥やしにすべく郷土物を部屋の押入れに貯め込んだ。

昭和四十年、私は郷土史料中心の古書通信販売「えぞもくろく」第一号を出した。折しも北海道明治百年を目前に控えた時期であつたので官民ともに活気が漲っていた。私はこの上昇気流を運良く捉えたのである。昭和四十三年に北海道立図書館は郷土資料室を北方資料室に改

稱して、文献蒐集の範囲も樺太、千島、ソ連極東部沿海州に拡大する見解を示した。業者もこれに追随してそれらの文献類を北方資料と統一して呼ぶことになったが、それは同時に巨大な資料の需要が生れたことを意味するものであつた。おまけに旧道庁舎を改装した赤煉瓦の中に新北海道史編纂のため北海道史編纂所が新たに設置され、また開拓使文書の解説作業と関連文書蒐集のため行政資料室が生れる運びになつていった。第一号は製図屋に依頼した青焼きの折本形式の奇妙な代物であつたが、この機運に恵まれて小成功を収めて、昭和六十二年の五十三号まで継続された。以後は「さっぽろ通信」と名を変えて二十号の今日に至っている。

北方資料は昭和五十年代までは確実な売れ筋商品であつたし目録の目玉商品でもあつたので、その後も熱心に蒐集に努めた。前述のような素人商法が出発点であつたので、アイヌ絵と古地図は既存の老舗にお任せして書冊に限定した。特別な抱負もなく生活の糧を得るため流れるまゝの年月であつたが、いつしか北方資料が面白くなり、その魅力にのめり込んだ。私達の蒐集が先生方の業績に光を添えることもある。後年私が初めて発掘した、北海道では

幻の本であった特高資料「特高関係要警戒者一覧表」もその当時であったなら、必ず新北海道史の一頁に写真入りで掲載されたと思われる。北海道立図書館の創立五十周年記念式典に招かれて出席した。錚々たる名士のほかに新刊書側は栗田出版、丸善、紀伊國屋等の顔触れで、特に栗田出版は戦後誌のあらゆるバックナンバーの大量寄贈の功労者と同じくしている。古書店側は弘南堂高木庄治氏と私の二人のみであった。業界の名声実力から見て弘南堂さんは穩当であるが、私の列席は小店の分際で破格の感じが伴った。組合には名実ともに優れた老舗や先輩は多いが、道立図書館の納品実績という点からはその人達を、抜いた、という感慨が胸をよぎった。

それは確か昭和五十年のことである。私の年齢は昭和暦年数に8を加えたものであるから五十八才であろう、この前後から一種のうつ病にかゝっていたようである。それは更年期というものか疲労が重なったものか分らない。就寝中とつぜん耳元でパンと大きな破裂音がして飛び起きたりした。夜中に隣室の電話機の信託音を聞いて目を覚ました。次の信託音を聞いてから起きようと身構えたが、それつきりで悪戯電話か幻聴か判らず仕舞になった。或る夜耳元でハッキリと「——たとえ奈良絵本でも、そこに田村麻呂の蝦夷征伐とかアイヌの朝貢の図がなければ、タダの紙屑さ」という声を聞いた。私は枕に頭をつけたまま、声の主について自問自答を重ねた。私の頭に妖怪みたいなものが巣食っている、そいつが時々音をたてたり本を蒐めさせたりしているのではないかな。奴はいつもテレビシーカ何かで私に指示するのだが、うっかり肉声で喋ってしまったのだ。実に他愛のない妄想であった。しかし本蒐めの妖怪も悪くないと思っている。その後幻聴は自然と治ったが耳鳴りの症状は続いている。

このままで書いて来て、私はNさんのことを思い出した。今どき妖怪をうんぬんすると、大方の人はゲゲの鬼太郎の読み過ぎだと笑うことであらう。しかし私は感得する。Nさんが東千歳駐屯の陸上自衛隊に配属になったのは昭和四十六年頃である。特に北海道を志望したわけではなく自然の成行きであった。出身地は岐阜の山奥とこの柿の美味いという話をした。日曜の休日毎に札幌に出て来て各店から北方資料の古書を買って漁った。私の店では上客の部類で時には晝食を共にしたことがあるが、あまり下卑た食事マナーに呆れた。俗に犬食いと言うものだろうが、更に加えて野獣がかりつづくようにガツガツと貪り食うのである。店内では本を選びながら、音を立て、放屁する。その粗野な挙措は郷土研究者の學者者らしからぬものだが、戦争のときは遅く頼母しい存在とも見えた。Nさんは私の店に本代六万円のツケを残したまま、半年姿を見せなかった。その間彼は都心の店で十数万円の蝦夷地図や鳥居竜藏の千島アイヌ等を盛んに買い込んでいたのである。私は中隊長に直談した結果、数日後Nさんは悄然と中隊長に伴はれて来店し代金を決済したが、そこで縁が切れたのである。

その後もNさんは自衛隊の給料では賄い切れぬほどの熱狂的な北方資料の蒐集を続けたことは同業者の噂で知ったが、私には既に無縁の人でしかなかった。それから四年後にもう一度Nさんに会うことになった。私の新店舗にかなり憔悴してすっかり面変わりしたNさんが訪れて来た。服装も労働着にサンダル穿きて、粗野な仕草だけは以前と変わらず、久闊の挨拶もなく「炭鉱鉄道手宮幌内間賃金表」を差出して、これを担保に一万円を三ヶ月借りたいとのことである。赤い古書展の帯紙がそのまゝで懐かしい。Nさんは既に自衛隊を退職して目下日雇生活という。退職金はすでに北方資料購入で使い果たし、私は理解に苦しんだ。返済の時、蔵書を少し処分されたら如何ですと尋ねると、「私は本は死んでも売らない」ときっぱり言い切った。

死んでも売らない筈のNさんの蔵書が、こともあろうにチリ紙交換業者の手で運び出されたのは昭和六十二年頃のことである。前年とつぜん精神に異状を来し市内の病院に収容されていた。家主は長期入院となり空部屋場所ふさぎのダンボール箱六十箇の本を、左程価値あるものと知らずに紙屑として処分したのが真相であろう。その一部が古書店に流れてNさんの悲惨な末路が知れたのである。

Nさんが北方資料の蒐集に手を染めたのは最初隊内での学習の参

考資料として必要であったからだと思ふ。当時の陸上自衛隊の軍事訓練の假想敵國はソ連であり、その豫想戦域は北方領土周辺であったと思はれる。その後Nさんは妖怪の囚人になったのである。妖怪の正体は、多彩な学術文献が複雑に絡み合い形成された北方資料のおもしろさ、その魅力と考えたらどうであろう。岐阜の山奥から何の縁もない北海道に来て、古本蒐集にのめり込み破滅への道を辿ったNさんを理解できるような気がする。

同病相憫むという言葉があるが、今私は彼を抱きしめたい。

ところで、この妖怪、妖怪マンガの水木しげる先生ならどんな風にお描きになるのだろうか。

(札幌 えぞ文庫主)

最新版 好評発売中!

全国古本屋地図'95

B6横判 四〇〇頁

定価一八〇〇円(税込・千三百一十円)

日本全国約二五〇〇軒の古本屋を紹介。各店への道順、取扱種目、定休日等を解説、主要都市地域の案内図一〇〇図挿入。分野別古書店一覧(東京・京阪神地区)、古書即売会一覧、文学記念館一覧、紹介全店の住所・電話番号簿、今回新たに五十音順店名索引を収録した。

発行所・日本古書通信社